「ない!」

有希は思わず声を上げて机を叩いた。朝までそこにあったはずの大事なピアスが、大学から戻ってみるとなくなっている。

それは彼にプレゼントしてもらった赤いピアスだった。

20歳の誕生日に、有希は東京で彼にピアスの穴を開けてもらう約束をしていた。その頃には東京で一緒に暮らせるようになる。それまでとっておこうと決めた大事なピアスが、机の上から忽然と消えていた。

どこか隙間にでも落っこちたのかもしれないと、有希はマニキュアやらカセットテープやらでごちゃの机の上を、ひとつひとつ片付けた。さらに引出しの中のものを全部さらって、椅子をどけて、床をまさぐって、必死で探した。だが、ピアスは見つからない。

暗澹とした思いで台所や居間も探してみようと部屋を出た。と、そのときだった。ちょうど帰ってきた由佳里の耳たぶにそのピアスを見つけたのは。

有希はすぐには信じられない思いで由佳里を見た。

「それって……お姉ちゃん、それって私のピアスだよね」

あっけらかんと由佳里は答えた。

「あっ、ごめん。もしかして、今日つけるつもりだった?」

言葉より先に、有希はつかみかかっていた。

「やめて、何するのよ!」

頭の中は真っ白だった。手を放しても、熱くなった気持ちはしずまらなかった。

部屋中のものを投げつけた。本、レコード、洋服、コーヒーカップ、写真立て……。そこらじゅうにあるものを手当たりしだい部屋の外に放り投げた。

彼との思い出が汚されてしまったような、彼との約束が壊れてしまうような、そんな思いが黒い波になって有希の中でうねっていた。

気がつくと、部屋には何も残ってなかった。子供のときから長い年月をかけて作ってきた自分の城が、自分の手によってこなごなにされ、影も形もなくなっているのを、有希は呆然と眺めていた。

10年以上つけていた日記——分厚い大学ノートの束も、その日全部消えてしまった。

「有希ちゃん、何書いてるの?」

「これね、彼氏への手紙」

「彼氏、函館の人じゃないの?」

「今年の春に東京に行っちゃったから。いわゆる遠距離恋愛ってヤツ?」

「へえ～。そりゃ淋しいでしょう」

「淋しいけど、平気。休みのたびに東京に遊びに行ってるし。こないだね、ディズニーランドにも行ったの。短大を卒業したら私も東京に行くし、それまでは手紙、せっせと書くんだ」

「でも、えらいね」

「なんで?」

「電話があるっていうのにわざわざ手紙を書いてるんでしょ? 近頃の若い人にしてはめずらしいよ」

「そうかな。私、文章書いたりするの好きだから、楽しいけど」

「遠距離恋愛は続かないなんて言うけど、有希ちゃんたちは大丈夫かもね。まあ、がんばりなさいな」

「ありがと」

夜10時。２年生になってから始めたカフェバーのアルバイトは意外に暇で、カウンターで悠々自適、有希は手紙を綴った。お客さんも常連のおじさんばかり、いずれバンドでデビューするという有希の夢を応援してくれるような人たちだった。友達や家族に自分の悩みを打ち明けるのは苦手だったが、ここに来るお客さんには、関係の薄さが逆に気軽に思えて、妙に心のうちを話すことができた。

毎日手紙を書くと彼に言ったとおり、本当に毎日書いた。まるで捨ててしまった日記の代わりのように、いいことも、悪いことも、包み隠さず書いた。彼になら何を知られても平気だったし、自分の行動や感情を文面にすることで、なぜか気持ちがすうっと涼しくなって、癒されるような気もした。彼からの返事に「有希の手紙はときどき歌詞に思える」と書いてあると、自分でもちょっと驚いたりした。

不安はなかった。彼がここにいなくても、孤独ではなかった。孤独というなら、むしろ彼に出会う前の、花の女子大生をやっていた自分のほうが孤独だったと思う。あの頃の自分には、希望も夢もなんにもなかったのだから。

離ればなれになって、良かったこともあった。それは、真剣に自分の未来を追いかけようとしている彼の姿に触発されて、有希もまた見失っていた未来を追いかけたいと切望するようになったことだ。サーファーメイクはすっぱりやめた。たいして親しくもない友達とお茶をする時間があるから、本を読んだり、映画を見たり、自分の内面を潤すことに費やすようになった。

「有希、近頃つき合い悪いよ」

そう言われても、少しも気にならなかった。考えてみたら、おもしろくもない人の噂話に耳を傾けていたとき、いつも澱のようなものが胸のところに溜まって、疲れるばかりだったのだ。

「じゃあ、お疲れさまでした」

「ごくろうさま。明日もよろしくね」

「はーい」

家までの帰り道、車を走らせる。バイト代を貯めて買った自分だけの車だ。冷たい風が吹く日でも、窓はいっぱいに開けておく。海辺で育ったせいかもしれない。風が運んでくる潮の匂いがあると、それだけで安心できた。

夜空には星星が輝いていた。

(今頃彼は眠っているのだろうか。それとも、自分と同じようにこの星を眺めているのだろうか)

星が少々窮屈そうに小さくちかちかしていた東京の夜空を思い出しながら、有希は車を走らせた。